
伝文

日本口承文芸学会 会報

【伝文】 第29号 2001年 9月

発行 日本口承文芸学会
〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28
國學院大學文学部 伝承文学研究室内
TEL 03-5466-0224

資料の保存と公開

常光 徹

私が昔話の調査に始めて参加したのは昭和42（1967）年だが、その頃はオープンリールを巻いた5キロほどのテープレコーダを持ち歩いていた。当時の写真を見ると、語り手の前に大きなテープレコーダーがでんと据わっていたりする。まもなくカセット・テープが登場し、年々小型化・軽量化するとともに性能も高度になった。現在使っているのは、手のひらにすっぽり収まるほどで、持ち運びの負担はまったく感じない。

ところで、口承文芸の記録にテープを用いるようになって以来、それぞれの調査者が手許に保管している資料は膨大な量になるだろう。先年、福田晃先生から早い時期に録音したテープの痛みがひどい、早急に保存について手を打つ必要があるのではないかという話があった。きっと同様の心配をしている人は多いにちがいない。そんな折、今春から会員の樋口淳氏を中心に日本民話データベース作成委員会（略称JFDB）が組織され、科学研究費補助金を受けてアナログデータのデジタル化に着手することになったのは朗報である。とりあえず本年度は3000件をデータベース化すべく7月から具体的な作業に入った。私も作成分担者の一人として参加しているが、パソコンを扱い慣れていないため目下悪戦苦闘中である（ただ、作業の工程を覚えてしまえばどうということはないらしい？）。

貴重なアナログデータをデジタル化することでほぼ永久的な保存が可能になるだけでなく、分類整理して将来はできるかぎり公開をし、研究の発展に寄与することを目的にしている。こうした仕事はすでに沖縄国際大学の遠藤研究室が、沖縄口承説話データベース事務局を中心に取り組み、成果の一部をCD-ROM（沖縄の民話1）で公開している。パーソナル・ユーズのコンピュータの普及によって、多量のデジタル情報を処理することが誰にでもできるようになった現在、これまで個人的に管理されてきた情報を大学、学会、博物館などの公的機関においてデータベースとして整理しなおし、広く利用できる道を拓くべきときに来ているように思われる。

「節談説教の節と語り」

小島 美子

節談説教は名古屋の祖父江省念師が盛んにやっておられた頃、小沢昭一さんなどが注目して、一時かなり評判になった。しかし最近では東京ではほとんど聞く機会がなく、もう伝承者はいなくなったかと思われる程になっていた。ところが節談説教が盛んだった浄土真宗ではなく、真言宗豊山派（長谷寺や護国寺の派）の僧正で新潟県分水町の本覚院住職渋谷隆阿師が、きわめて感動的に節談説教を語っておられることを知った。私は例会のご案内に、“真言宗豊山派の節談説教を新におこされ”と書いたところ、渋谷師から当日、古くは弱いながらも真言宗豊山派でもやった歴史があるので、正確には“復活した”というべきであるというお話があった。しかし直接それを継承される機会はなかったわけで、事実上は“新におこされた”ようなものである。

そのため渋谷師は、関山和夫氏のいわれる“聴衆の感覚に訴える詩的・劇的な情念の説教”の必要を感じとられると、これまでの節談説教を入念に研究され、自ら台本を作り、語り方に多くの工夫を重ねられた。それで単なる継承者ではなく、創造者として、分析的にも理論的にもお話を伺えるだろうと私は考えて、お迎えしたのである。その結果は、期待以上で、さすがは本物の仏教者らしく（失礼な言いぐさをお許し下さい）、いわば企業秘密といってもいいようなことまで率直にお話し下さった。

実演は「弘法大師御一代記」の中から御入寂の段を語られたが、持ち前の美声に加えて、話の緩急、地語りから母音を引いて、フレーズの途中からメロディになったり、その逆になったりの転換、また講談師も顔負けと思われるような会話体の表現、学会員の固い空気を見事にくずして笑わせ、話に引込む上手さなどなど、見事なものだった。そしてインタビューでは、そういう表現をどのようにして作り、また即興的に変化させるかなどを、私の不慮な質問にも、まともに答えて下さった。今回は私の専門分野から音楽学的な面にしぼって伺ったのだが、参加された方々は大変喜ん

で下さったらしい。

付記 なお浄土真宗でも石川県門前町の満願寺住職の広陵兼純師が節談説教をなさっていることを渋谷師から伺い、その後実際に私も拝聴したが、関山和夫氏は何度も訪問されているという。（東京都）

* * *

美濃部京子

第25回大会の公演は…柳廣孝、飯豊道男両氏によって行われた。

まず、以前会場校である名古屋経済大学に勤務しておられたという柳氏の「1920年代、〈心靈〉は増殖する」と題された講演は、大学近くにある古い土葬の儀式を行った跡であるという石畳と地蔵の話から始まった。明治維新以降近代文明の広がりにより一旦排除された靈魂に関する信仰が、明治30年代になって西洋文明の心靈学が入ってくることによって再び注目されるようになったということである。超能力者をめぐって、心理学の立場からそれを支える動きがあったこと、文学や医学、民俗学などそれぞれの立場からそれを扱う人たちが出てきたことが、当時の時代の流れと照らし合わせながら、述べられた。さまざまな分野の人たちが、さまざまなアプローチで心靈現象を捉えようとする動きが現代の口承文芸研究の有り様と通じるところがあり興味深いものであった。

続く飯豊氏の講演は、「グリム童話の世界」と題し、グリムの「ふたりの旅職人」（KHM107）に触れながら、グリムの時代における職人と旅の様子について述べられた。この話は、話自体が現実描写（村や絞首台、城など）と非現実（森、見えなくなった目の治癒、動物の援助など）の世界が交錯し、職人の作るモザイクのようであるという。また、エジプトに起源をもつ二人の商人の話が、ドイツで職人の話になったのは、ドイツにおけるこの話の語り手が主に職人であったのではないかと述べられた。ある種異端のものである昔話の登場人物は同時に昔話の語り手でもあった。こうした異端の人たちによって語られた昔話が、グリムの手を通すことによって、誰が聞いてもわかる話へと変化していった。仲間うちの話が、大都会の語り手に語られるようになって、昔話から童話に変わっていったというのである。口承の昔話が「グリム童話」に変わっていくひとつの道筋が当時の社会状況を交えて話された。

（静岡県）

＜報告＞研究発表会第一会場

斎藤君子

奥田統己は「アイヌ口承文芸のジャンル分類：目的と方法」と題し、従来の分類は語り手自身による認識と、研究者が外から観察した特徴に基づく分類の無批判な結合であるとし、統計学的手法を取り入れた、より客観的な分類の必要性を主張した。

于曉飛は2000年8月に中国黒龍江省のホジエン族を訪れた際の聞き書き資料に基づき、「ホジエンのイマカン（英雄叙事詩）について」を発表した。中国ではイマカンの採録は50年代半ばから始まったが、これまでに発表されたものはわずか7部に過ぎず、それも漢語に翻訳整理されている。従って、ホジエン語を直接文字化して記録した、今回の彼女の仕事は大きな意味をもつ。イマカンの伝承は狩りや漁で露営したときや冠婚葬祭時に行われ、短いもので10数分、長大なものでは20数時間に及ぶ。伝承者の高齢化が進む現在、フォークロアの採録が急がれる。今回、報告者は「シタ・モルゲン」と題する説話を取り上げ、語りの形式と粗筋を紹介した。

荻原眞子の「ユカラのヒロイン —英雄叙事詩の比較研究に向けて—」はアイヌのヒロインの比較対象をユーラシア大陸のツングース、ブリヤト、ヤクートなどが伝承する英雄叙事詩に求めた。報告者はこれらの民族の伝承との比較から、ユカラのヒロインの特質として敵中の花嫁であること、巫者であることを挙げる。研究の枠を近隣諸民族に広げ、アイヌのユカラを新たな視点から見つめ直す彼女の仕事に期待したい。第一会場の発表にはこの他に、梶濱亮俊による「チベットに伝わったインドの説話」、川島秀一による「巫女がつくる歴史伝承—阿武隈山地の小手姫伝説」、畠山篤による「久高島イザイホーの神歌の分類」があった。例年のことではあるが、分科会では時間の制約から発表が駆け足にならざるを得ず、質疑応答の時間もほとんど取れないのが実情である。今後の課題として、発表者の人数を減らし、一人の持ち時間を増やすなどの試みも必要ではないだろうか。

（埼玉県）

<口承>研究の地平：歴史・言葉そして<口承>

根岸 英之

本シンポジウムは、故大林太良氏の「口承文芸の時代は終わりつつある」という見解を受けつつも、「口承文芸」とは我々が付けた名称なのだから、それは私達の「視線」と「問いかけ」の問題なのではないか、という立場に立って開催された。

まず、司会の重信幸彦氏「趣旨説明」が、如上のような基本的スタンスを確認した後、「口承文芸」という考え方そのものをもう一度捉え直し、それが歴史的産物であることを意識化することで、<口承>研究の地平（可能性）を問い直そうと述べ、柳田國男の「<口承>文芸」概念の提示に込められた「問い」の可能性について指摘した。

小池淳一氏「『村の話』・郷土・昔話集」は、戦前の青森県で実践された「村の話」の新聞連載記録を取り上げ、「話型研究」に回収されない郷土をより深く知るための昔話生物学的な可能性や、生活の場を問い直すために語られ発信された歴史的な「話」であることなどを指摘し、資料集の持つ歴史性と、資料集を編むことは歴史を刻む行為であることなどを説いた。

佐藤健二氏「新語論の発想と口承文芸における<歴史>」は、柳田が<口承文芸>で仕掛けた戦略を読み解きつつ、それは端的にいうならば<文字>を媒介とした「文学」概念の解放であり、言語文化の発生を、命名や新語の局面でとらえようとする立場が基本にあったのではないかとする。ただし、その「新語」とは、生活者自身の環境に根ざした「内からの新語」であり、「聞き手」の承認という「場」を通して初めて定着するものと見なす。この「新語」の発想に着目することで、口承文芸研究の可能性を提起した。

森明子氏「『場』による歴史の生成」は、オーストリアでのフィールドワークでしばしば経験する、「いま」と「かつて」を対照させて生活の様相の変化を語る話法に注目し、「いま／かつて」の話法は、自分の生活経験を他の人に話して聞かせる話法であり、それは、聞き手の存在する

「場」によって生成される、ことばを介した「歴史」化のプロセスであると説く。

助川幸逸郎氏「弱い語り手・強い語り手」は、標題についてより、コメンテーターとして、資料集を編むことのメッセージ性、「いま／現場」を絶対化するおそれなどについて言及した。

その後、会場からは、山田巖子氏による「世間話」研究のあり方について、根岸から「生活譚」というタームの提示の意義、高木史人氏から「昔話」を近代と捉える視点、などの発言があった。

今回は、会場で『<口承>研究の地平』という発言者たちの予稿集とでもいうべき冊子が配られ、それを活用しながら進められたが、執筆者以外の人が、それらを充分咀嚼するゆとりがなく、議論に加われない恨みが感じられた。

また、設定された「歴史」というキーワードも、兵藤裕己氏の質問に見られたように、「口承文芸研究」の「歴史化」の問い直しではなく、「語られる歴史」についての問題に焦点が当たってしまったように思う。さらに、歴史社会学、文化人類学、国文学専攻者の発言は、広がりをもたらした反面、口承文芸研究の問い直しという焦点からは、やや拡散をもたらしてしまった不満が残った。

このところ、第38回研究例会「口承文芸の未来」1999. 10、第39回研究例会「現代における口承文芸研究の条件」2000. 3、『口承文芸研究23』特集「メディアの結節点としての<口承>」2000. 3、第24回大会シンポジウム「伝承が再生産する歴史」2000. 6、と、口承文芸と「現在」とを切り結ぶ問題提起が繰り返されている。

恐らく、ここに口承文芸研究の直面する課題があるからであろう。本シンポジウムも、こうした問題への一つの布石であり、今後さらなる検証が求められると言えよう。

なお、『<口承>研究の地平』は必読の冊子。残部などの問い合わせは、高木史人氏まで。

(千葉県)

小堀 光夫

武田 正

第25回大会、第2会場では、以下のようなタイトルの発表が行われた。①高木史人「民俗学者としての市橋鐸（鷹）－特に伝説の研究者として－」②細田明宏「浄瑠璃における聴衆の語り手への一体化－「クドキ」に見られる構造－」③如月六日「「オコサマ」と「ネズミのすもう」に見る伝承の発生・移動・民俗研究というメディア－栃木県の事例－」④杉浦邦子「語り手における昔話の変容－語りの座と時代の変化から－」⑤野村典彦「事故原因を事前に準備する言葉－朝茶と事故との因果を説く話－」⑥斎藤純「法螺抜けと法螺吹き－呪宝から怪物へ－」以上である。

①高木氏の発表は、郷土研究者、市橋鐸鷹の人生と、その研究の軌跡、読書歴について考察しながら、彼の伝説研究が、話の分類よりも、むしろ伝承経路や話者に視線が向けられていることを指摘した。

②細田氏は、浄瑠璃における登場人物の真情吐露「クドキ」に注目し、「クドキ」の口頭性が、聴衆と語り手、さらには登場人物とも一体化するためのコミュニケーション機能を担っていることを考察した。

③如月氏は、民俗研究者による昔話の意図的な移動と、その移動によって作られた新しい昔話伝承をめぐる、民俗研究者のメディア性とモラルを指摘した。

④杉浦氏は、昔話の語り手の「持ち話」が、語り手自身の話に対する思い入れの深化によって、話が変化、成長して行く過程を具体的な事例を元に考察した。

⑤野村氏は、「朝茶は難逃れ」という諺と、実際にあった事故の話が「朝茶」の一点によって具体性を獲得する「朝茶を飲まないで事故にあった」世間話に注目し、そこに世間話の動態が垣間見える事を指摘した。

⑥斎藤氏は、山崩れは法螺貝が抜けることによって引き起こされるという伝説と、その法螺貝を吹いて雨乞いをする呪宝性などに注目し、法螺貝が、異界との通路となっているとの考えを示し、タイトルにもある呪宝から怪物（災害）への話の変遷について考察した。

（埼玉県）

今年で15回を数える山形県新庄市の「みちのく民話まつり」は、重要文化財に指定されている旧矢作家で、炉端語りが、2月10日に行なわれた。地元の語り部と俳優で新庄市出身の庄司永建さんの語りで始まった。その晩は地区の公民館で「やきめし文化交流会」として、参加者が次々に、土地々々の言葉で語りを披露してくれる。民謡や踊りも飛び出し山形の語りの次には茨城や遠く関西の語りも出る賑やかさであった。次の日は新庄市民プラザに場所を移し、市内の小学生が語りに挑んで、拍手が鳴り止まなかった。

山形県内には三十を越す民話語りサークルがあり、「やまがた民話の会協議会」が結成され、去年は黒川能で知られる櫛引町を会場に三百人を越える民話愛好者が集まり、今年も新庄市を会場に、今準備がすすめられている。

全国的にも珍しい民話博物館たる山形県南陽市の「夕鶴の里」では、いつでも民話語りが聞ける上に、2月には小学生を含む新人の語りも披露され、イベントとしてでなしに日常活動としての民話語り運動に挑んでいる。耳に入っているだけでも、山形県内での語りのイベントは、尾花沢市をはじめ、飯豊町・真室川町・米沢市・大石田町などで行なわれたようである。

平成15年には国民文化祭が山形県を会場に行なわれることになっており、新庄・南陽市で「語り」が行なわれることに決定し、イベントを含めて、準備が現在すすめられている。昔話集出版も盛んで、『鶴女房』（米沢市を中心にした地域の昔話集）及び『眺峠のとなと昔』（80話の語り手小林幸二郎さんの昔話集）が見られる。

なお本会の理事、青森の佐々木達司氏の『ことわざの周辺』が5月に出版されていることも加えねばならない。

（山形県）

7月9日(月) - 7月28日(土)

米屋 陽一

〈報告〉「民話カラオケ」による民話普及
2001年 栃木・茨城県

如月 六日

栃木・茨城県における民話にかかわる活動について報告する。

各地に広まったお話の輪は定着し、団体やグループはかなりの数にのぼっているが、民話に限定したそれとなると一気に小さな数となるように思うがどうだろうか。少なくとも栃木・茨城ではそのように見える。ここでの民話のもっぱら子どもに向けた読み聞かせや語りといった〈表現〉であり、語り手たちの興味もまたもっぱらそこに集中しているようである。グループ間の交流は薄く、今報告にあたる栃木県でのリサーチではまったく交流をもっていないという結果であった。活動はいわゆる〈出前〉による提供で、お話の場は個人やグループが図書館や学校などに働きかけることによって確保されるのが普通で、栃木県の公的機関の対応は「場を貸す」という意識が明確に見られた。

その点、茨城県が民間の企画に賛同した官民一体の「茨城県民話普及推進協議会」の活動は興味深い。同会は〈民話カラオケ〉を使って県の民話を普及しようという目的で99年に設立された。民話カラオケとは、音楽とナレーションの入った物語のアニメーションが一度流れ、続いて音楽とアニメだけが流れるので、画面に合わせて添付の台本を見ながらマイクに向かって民話を語るというもの。会長の藤田稔氏が人気のカラオケにヒントを得て発案、ビデオ製作会社経営の槻木春紀氏などがボランティアで制作した。「何回もビデオを見ながら語るうちに、自然に民話を覚えてくれることが狙い」なのだという。〈子どもたちが語り手〉というこの民話普及活動は、会発足から2年を前に県内15の小学校で児童たちが取り組み、発表会が行なわれている。今年2月15日には活動のさらなる推進と浸透に向け「第2回ふるさとの民話を楽しむ県民の集い」が金砂町サンリバーホールを会場に500人の参加者を迎え開催された。現在、民話カラオケは「ダイダラボウ」をはじめ12作品にのぼる。 (栃木県)

友人夫妻(エトノソウノヲル)が『遠野物語』の幾編かを歌曲化した。その発表が「東京音楽祭」(編:朝丸)であり招かれた。5年以上前の話である。それを機会に「東京音楽祭」には毎年顔を出すようになった。今年のテーマは「聲-Voices-」。予定表の空欄をチェックしてチケットを確保した。足を運んだ企画のみを記してみたい。

・12日(木) 韓国伝統歌唱「安淑善/魂の声-パンソリとシナウィ」[パンソリの名人・安淑善が演じる身分を超えた切ない愛の物語〈春香歌〉。当代一流の楽師たちが名人芸を競う合奏シナウィも聴きもの。=ソフワトより・財閥] (かつしかソノエビル)

・15日(日) トーク&パフォーマンス「語り伝える楽師たち 西アフリカ“グリオ”の世界」[グリオは、西アフリカで古くから受け継がれてきた世襲性の語り部・楽師。グリオ自らがその社会的・文化的役割を語る。監修:鈴木裕之] (朝丸)

・15日(日) マリ帝国英雄叙事詩の語り「カセ・マディ・ジャバテ:グリオの最高峰が語るスンジャータ大王伝説」[グリオのスター、カセ・マディ・ジャバテが語る13世紀マリ帝国の始祖・スンジャータ大王の生涯。魔術的魅惑をたたえた語りの極致! 監修:川田順造] (朝丸)

・17日(日) 声の呪術「サハ・シャーマンの巫儀」[極北の地サハ(ヤクート)から有力なシャーマンが来日。今も実践されている巫術を初公開! 監修:谷本一之] (朝丸)

・22日(日) 日本の声2「九州の盲僧琵琶と妙音十二楽」[琵琶を弾じながら仏教説話を語る釈文琵琶と九州の盲僧たちによって受け継がれてきた特殊な法会「妙音十二楽」の貴重な上演! 永田法順他] (朝丸)

以上の企画はいずれも満席で、日本口承文芸学会会員の姿も会場でも数みかけた。誌面の都合でタイトルのみを記した。他の企画を含めたご紹介・ご感想を「伝え」編集委員会にお寄せいただきたい。 (千鶴)

2001年前期.

白石 昭臣

宮地 武彦

中・四国地域ではアジア民間説話学会を介しての発表と催しが注目される。

3月27日、梅花女子大（大阪）で行われた日本支部総会には、昨秋のソウル大会（第6回大会）での成果の報告と発表が日本代表の稲田浩二氏（岡山）により行われたあと、酒井董美氏（島根）が、「日本の昔話の兄弟姉妹譚の特徴」と題して、ソウル大会につづいて発表した。

ソウル大会では稲田氏の「狗耕田故事」（花咲爺）の発表などをめぐって討議がすすめられ、これを“犬の化生”をモチーフとすることで全員一致。従来“有利な交換”に分類してきた欧米中心のATに替わる新しいタイプインデックスを、ひきつづいて、これ以外の民間説話に対しても作成していくことで了解が得られた。（AFNS. NEWS LETTER NO. 7より）

この稲田氏を中心とする意欲的な活動をうけて酒井氏は、アジアでの共通理解を目途に尹光鳳教授のいる広島大学で7月22日シンポジウムを行う。韓国からも崔仁鶴氏ら36名の参加があり、酒井氏は「八百比丘尼の伝承」を発表する。

稲田氏の主催する昔話研究会も毎月、岡山市で例会を催している。稲田氏の他に6月の例会では筒井悦子、河田則子氏が「昔話の伝承—その現状とひろがり」を発表している。

田中肇一氏は、「湖陵町の民話」を昔話、伝説、世間話に分類して『湖陵町誌』（島根県簸川郡湖陵町刊）に記している。

白石昭臣は島根大学の主催によるエルネット・オープンカレッジ「たたら製鉄と出雲の地域文化」の発表に加わり、2月4日、産鉄の伝承について、技術工程との関わりから説明、鬼、鶯、朴、湯をキーワードに、伝承の底に流れている論理を描き出した。発表のあとシンポジウムが行われた。今秋は、銀山をテーマに催される。白石も参加する。（島根県）

佐賀民話の会は昭和59年6月に発足し、18年目を迎えた。その間、会は機関誌「佐賀の民話」第6号、報告書「牛津の民話」（昭60.6）・「基山の民話」（昭61.8）・「三日月の民話」（平3.9）・「三根の民話」（平8.3）・『嘉瀬川ダム建設に伴う学術報告書・口承文芸』（平12.3）などを発刊した。なお、会員による活動として『肥前伊万里の昔話と伝説』（昭61.10）・『水ぐるま』（平3.7）・『嬉野の民話』（平9.3）・『太良の民話』（平10.3）・『肥前の口承文芸考』（平11.8）『多久・飯盛翁が語る佐賀の民話』（平11.9）などの発刊がある。

現在、会員は多久市・鹿島市・東松浦郡相知町の全域および納富信子さんの語る昔話（佐賀市）の聞き取りも終わり、発刊に取り組んでいる。また多久市史・鳥栖市史の口承文芸、小城町の民話教材のため活動している。『肥前伊万里の昔話・伝説』の語り手・松尾テイさんは、入院中で残念であるが、『水ぐるま』の語り手・蒲原タツエさんは日本口承文芸学会でも昔話を語ってもらったが、現在は県内外の子供たちへ昔話を語り歩いておられる。蒲原さんの語る830話は、世に出さなければならぬ。

地域活動の活性化が叫ばれながら、口承文芸の地域活動は危機に見舞われている。高齢化社会と言われながらも、口承文芸への若者の後継者は皆無に等しい。何とかしなければという声は耳にする。このような現状だから、口承文芸の世界は先が真っ暗闇だ。それは価値観の違い、ものの見方・考え方の違いによるものか、いずれにしても大人たちの責任ではなからうか。とにかく原点に戻って、若者たちの声を受容し「継続は力なり」の大切さを意識し、実践活動をするしかないのではなからうか。（佐賀県）

事務局より

○2001～2002年度 日本口承文藝学会 運営理事（各委員会）名簿

今期から、委員会の組織・構成に変更があります。（○は長）

〔会長〕常光 徹 〔事務局〕○磯沼重治・立石展大 〔機関誌委員会〕○徳田和夫・中川 裕・藤井貞和・間宮史子 〔会報委員会〕○米屋陽一・大島建彦・白石昭臣・武田 正 〔大会委員会〕○石井正己・岡部隆志・花部英雄・野村純一 〔例会委員会〕○兵藤裕己・大島廣志・中村とも子・依田千百子 〔監事〕小堀光夫・樋口 淳 〔幹事〕飯倉義之・高塚明恵・竹内邦孔

○機関誌『口承文藝研究』既刊号（バックナンバー）の廉価販売について

刊行後3年を経過（発行されている最新号から3号分遡る号まで）した機関誌『口承文藝研究』を一律500円（送料別途）で販売しています。会員外でも可。

現在、24号が刊行されていますので、21号までがその対象となります。20号に『『口承文藝研究』総目録』がありますのでご参照ください。なお、1号から4号までは在庫がありません。残部僅少の号がありますので、お早めに。

問い合わせ、申し込みは、事務局「既刊号」係まで、文書でお願いします。発送時に、送料込み代金を請求させていただきます。

ご所属の図書館・研究室などに架蔵いただきますようご高配をお願いいたします。

訃報 本学会の理事を務められた高橋宣勝氏が10月28日に逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

○「伝え」第29号は、2001年9月に発行・発送の予定でしたが、大幅に遅れましたこと、執筆された方をはじめ会員各位に深くお詫びいたします。〔事務局〕

☆日本口承文藝学会への入会希望者は入会申込書をご請求下さい。

入会金 1000円、年会費 4000円です。入会申込書の請求は下記の事務局まで。

〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28

國學院大学文学部伝承文学研究室(野村教授)内

日本口承文藝学会事務局

TEL 03-5466-0224

送金先は、[郵便振替] 00180-4-44834 です。

The Society for Folk-Narrative Research of Japan

c/o Prof. J. Nonura, Kokugakuin University,

4-10-28, Higashi Shibuya-ku, Tokyo, 〒150-8440, Japan

口承文藝に関心のある方をひろくご紹介ください。

☆「伝え」編集担当は、米屋陽一・大島建彦・白石昭臣・武田 正です。